昭和庚申台湾後山之旅　（昭和十五年 台東・花蓮港・宜蘭）

潮州を出た自動車は寿峠（ことぶきとうげ）を越え途中何度かの休憩を取り漸く太平洋を眺め台東に至る。昨日の送別会ではなにゆえかような旅程を組んだのかと相当に嗤われたものであるが、自分は内地には帰りたくないし、どうせならえちらおちらと往くにしくは無しと思い、ヨシ、東台湾巡りでもしてみようと思ったのであるが、車中からつらつら太平洋沿いの平地にへばりつくように建てられた部落を眺めていると、山を距てた向こうの町の噂などついぞ聞くことはなかったことに改めて気づかされる。

東台湾はかつて卑南（びなん）大王の治める蕃人の王国であり現代も陋習多く、例えば小正月の寒単爺（かんたんや）（※旧暦一月十三日に行われる、寒単爺に扮した男に爆竹を投げつける祭）等台湾の旧祭は兎に角爆竹の類多く、また元服に際し少年が度胸試しに家畜を刺し殺す祭は野蛮ゆえ総督府より禁止されたと聞く。台東の沖には二島（緑島と蘭嶼（らんゆい））あって、総督府は該島への往来を厳禁しているが、フィリピンより渡り着いた全裸蕃人は性温順、島外より客が来れば必ず接吻すると云うのが理由とか。

観光案内によると知本（ちぼん）温泉は台東第一の名湯と云う。どうせ一生行けなくなる場所であるなら一度は入浴したいものであるが、この他花蓮港には玉里温泉、宜蘭には礁渓温泉にポンポン温泉あり、さぞかし美女も多いことだろう。しかし途中屏東台東の中間に聳える大武山谷は山万丈にして谷千仞、前にそびえ尻屁（しりえ）に誘う箱根よりも遥かに険阻であり、そもそも台湾を東西に貫く道路は新らしい南廻道路を除いてはいずれも獣道に毛の生えた程度で、高雄の知り合いからは台東へ迄行くなら船旅の方がましだと忠告されたほどである。

台東街は屏東市の十分の一の規模にして全てにおいて小振りにして閑かであるが、監獄だけは立派で全台の凶悪犯を集めていると云うから、けだしオーストラリヤのごとし。書店に寄ると時局本が入荷されたという張り紙がデカデカと張られ不愉快になったが、自分は吉川英治ｃの小説を買いたいのに「日本人必読」等と称しヒトラー氏の本を売りつけようとする台湾人店員にホトホト閉口した。

ところで日本人はかような僻地でも総督府警察の支所を設け「我らこそ一等国民なるゾ」と威張り腐っているのであるが、多くは内地の部落で食いつめた揚句に台湾くんだりまでやってきた輩であり、当時の恨辛を思い出しては台湾人や高砂人に当たり散らしているに過ぎないエテコーである。奴等はそれを知っているから内心日本人を小馬鹿にしていて、「日の丸や鉤十字を礼讃せねば汝一等国民にあらず」と云わんばかりに色んなものを売りつけにかかるのだから、支配被支配の実態は得てしてそういうものである。そもそも台東は人が足りず、壮健な高砂人は貴重な労働力であるから、高砂人は兵隊に取られることもなく、汽車にも無賃で乗れると云う。

盛り場にはエロバーの類あり。夜は小料理屋で切身魚のフライをあてに地酒を飲む。酌をする女は関西弁の日本人で、身の上話を聞いていると、女はもともと兵庫県某村に住んでいたが、夫婦で一旗揚げるべく台東まで来たものの夫はマラリアで死んで仕舞い、自分は台湾に身寄りもなく乞食のような生活をしているのだと云い、自分はこれから内地に帰るのだと云うといたく羨ましがられた。女と ERO するが、しかし自分はうつうつとして愉しまず。せずりのほうがましだったと後悔する。

朝、乗合バスで知本温泉に向う。知本湯元は原来蕃人の温泉であるが、改隷（日本統治）後日本人が開発し、今や台東随一の美景などと称されるようになった。台東街から遠くもなく、紀州の奥座敷竜神湯峰のごとき風情あるも、妓女おらぬ故おめこはできぬ。しかも温泉街の中心には真新しく露悪な警察温泉（※警察療養所。戦後接収され警光山荘となった）まで建っているのだから、著じるしく興を削ぐ。知本の神湯に浸かるも自分の気色は悪いままで旅の憂うつも全く取れず。茶菓と称する紅花の漬物を食べたが得体の知れぬ味付

であった。なお知本は温泉だけでは立ち行かずキナで儲けているのだと云っていた。結局一泊もせず台東に戻る。

もはや行きたい場所もなくなってしまったので駅で汽車の切符はないかと聞いたら今晩の花蓮港行き夜行があると云われた。夜行に乗るのも面白いと思い切符を買う。晩飯は盛場で小料理と地酒一献。女なし。今日の酒も面白くなし。

夜十一時発の汽車はノロノロと人少なく揺れも酷く、そして外の景色も闇で一切見えないものであるから、それならいっそ縦貫（※高雄から基隆をつなぐ縦貫線）に乗ったほうが楽とも思ったが、それにしても内地には帰りたくなし。玉里辺りで目が醒め（結局温泉は寄らず）、みずほ、ことぶき、早朝花蓮港駅に達する。

花蓮港は清国人が名付けた支那らしい名前の町だが、町に蓮はなく、支那らしさもなく、ただ高砂族に威を示すせいか駅や役所や寺社仏閣やらは軒並みに立派であった。花蓮港に住んでいるのはケタ糞の悪い軍人と御用商人の眷属ばかりで、ほとんどの日本人は吉野という郊外部落に住んでいると云う。またこの辺はあちこちに屏東や台東とは違う種類の高砂族がいるが、花蓮のアミ人はとりわけ素朴な美女が多く、台北や基隆から直通列車を通せばアレ目的に大きく栄えると思う。名物のアンコイモを二個食べる。花蓮港は天気悪く、これはといった名所旧迹もなかったので総じて無聊で、折角なので福住遊郭を冷やかしてみたが人三化七の故に遊ばず、帰りの喫茶店でパインアップルソーダをひと息に飲んでトキワホテル泊。明日は朝早くから大タロコ。バスに乗り遅れるなと自分に言い聞かせるも、乗りたくもなし。

朝一番に花蓮港を出発した乗合バスは臨海公路を走り有名なタッキリ渓（太魯閣渓谷）を経て進む。断崖絶壁を開削した道路はまさに「華陽国志」の蜀道に劣らぬ壮絶な景色で、バスが揺れる度に隣の爺婆は法華経を唱えヒヤヒヤ、ヒヤヒヤ。ようやく昼過ぎに蘇澳に至る。蘇澳は小振りながらも天然の良港であり港は大小船ビッシリとまるで和歌（浦）や大浦のよう。豆腐岬という変わった名前の地名があるのも面白く、漁業商業に妓業もさかん。蘇澳は元々支那人蘇氏が開拓したためその名があると云うが、実際は沖縄人も多く開拓し沖縄部落も多い。開拓当初、蘇澳の蕃害は鬼来迎の如く酷いものであったが、改隷後その蛮風も漸々消滅し、今や蕃人は性温厚にして台湾善民の鑑と賞さるるようになった。殊に宜蘭蕃女遭難之件（※昭和十三年十月に蕃人の少女が日本人警察官の荷物運びを手伝っている最中に沢へ転落し死亡した事件を指す。このエピソードより『サヨンの鐘』という宣伝映画がつくられた）はその最たるもので、総督府や新聞社は模範蕃婦などと持てはやし美談に仕立てたが、元はと云えば猛雨のさなかに無理やくたに徴用され命を落とせられたのだから酷い迷惑である。彼女の父兄には数百円の見舞金が寄せられたが、これを妬む輩あり、蕃女某は実は醜女である淫婦であるのとけしからん噂を云いふらしている。婦女の生命貞操を汚すウソイツワリ奸悪な不逞の輩はよろしく北海道か樺太の監獄にでも放り込むべきである。

蘭陽（※蘭陽は現在の宜蘭県一帯を指す）でも蕃地視察はさかんで、特に蘇澳の南北に蕃社多く、途中トロッコや轎に乗り換えて視察することが出来るのである。紀陽（※和歌山を指す）と同様各地に温泉の多い処で、内外に著名な礁渓温泉をはじめ多数の温泉あり。蘇澳には天然温泉と炭酸水製造所があるが、何でも井戸を掘ろうと試みたところ多量の炭酸水が出てきたのだと云う。建物に装飾を施せば忽ちトレビの泉に勝るとも劣らぬモダン台湾八景となるであろう。一杯飲んでみたところ甜く旨く、経営者は何と和歌山出身であると聞く。

午後遅くに蘇澳を発ち夜前に宜蘭に到着し一泊、又礁渓温泉で一泊（※蘇澳から宜蘭に行く途中に製材業で繁栄した羅東という町があるが、こちらには立ち寄らなかったようである）。宜蘭は元々五囲と云い、蕃害を防ぐため囲のある町であったが、南洲公御子息（西郷菊次郎）が本格的に建築し比較に繁栄している処であり、中ではカトリックや天理教の坊主が楽器を鳴ら

し益々賑やかである。近辺は霊泉多く、カタルを治す霊水も有ると云う。軍人は見ない。ただ一つ気に食わぬ処は、百貨店妓楼一つ無い土気の田舎町に過ぎぬのにグレート宜蘭と称し市制を施行せしめんとすることである。夜は比較に閑散としているが、これは近くに礁溪（しょうけい）温泉があるから致し方ないことである。

宜蘭の名物は、或る者は家鴨と云い、有る者は肉羹と云い（※肉のすり身を使ったスープ。淡水の魚丸湯、新竹の貢丸など台湾各地にみられる料理である）、或る者は寿司と云う。蘭陽は稲作盛んで内地よりも安くて旨い米があると云う。内地では精動（せいどう）（国民精神総動員の略語）ヒステリーが跋扈し、ヤレぜいたく禁止だヤレ白飯禁止だヤレ日の丸弁当だと云う為に、米搗棒や南部岩代の梅干やらが矢鱈流行っていると云う。阪急百貨店では寿司の提供を辞めたとも云い、内地では最早白飯は鱈腹に食べられないぜいたく品なのである。リクリクカイカイカントー軍の輩は支那との戦争に碌に勝てもせぬ癖に東亜秩序を遠吠える体たらく、そして自ら贅沢三昧の癖に自分らに節約を強要するのだ。精動の輩もかくのごとし。このやつばらこそまさに勦滅すべき兇悪の病巣である。忌々々々糞喰らってしまえ。米が食べたくなったので近所の洋食屋でオムライスとライトを頼むが、オムライスの中味はビーフンであった。夜遊びせず。

自分は宜蘭に親しき知合いもなく只の過客に過ぎぬのであるが、この日の宿は自分以外の客が居なかったことから、宿に居る沖縄出身の雇人が話しかけてきた。身上話を聞いていると男は元々糸満の奴隷（糸満売り）で年季が開けて台湾に出てみたものの、蘇澳で足疾となり帰る処もないものだから此処に住み込みで働いているのだと云う。まだ若く、相当に悲惨な人生を送ってきた筈であるが、全く屈託のない男であった。男は過去に和歌山の人間を泊めた時に南紀に小タッキリがあると話してきたので、それは恐らく古座か奇絶峡のことであろうと答えた。宜蘭の名所を訊いた処、町内に公園が、山中に温泉があると云う（※員山温泉のことか）。温泉は宜蘭よりやや遠く、繁栄を礁溪温泉に取られているからその分サービスも好いのだと云い、ついでに朝鮮人参を売っている薬局まで教えたものだからやや露骨に思ったりしたが、恐らく他意はないのだろう。

ところで李香蘭は実は日本人であると云う出所不明の噂で盛り上がった。男によると李香蘭は支那顔に非ず日本人であると云うのだが、自分は諸葛丞相を日本人と信じるのと大差ない噴飯ばなしと思う。それにしても李香蘭は満支の怪女である。どのように取り入り出世したかは皆目判らぬが、膀胱カタルの関東軍の輩は李香蘭に尽とごとく鼻毛を抜かれているのだから凡そ男とは皆助平なのであろう（※先述した宣伝映画『サヨンの鐘』は、くしくも李香蘭が主人公をつとめているが、この時点では知る由もない）。

朝、時間があったのでぶらぶら散歩するが、宜蘭は小振りながらも仲々味のある町で、内台雑居し、官庁銀行も多く、中央市場の構えは仲々立派であったが中は入組んでいてまるで七曲（※和歌山市の七曲商店街）の如く。まだ早い時間なのにはなはだ暑かったのでアイスクリームを買う。

公園で首塚を眺めていると、みすぼらしげな風体の支那服を着た老翁が日本語で話してきた。自分は清国□□年（※「同治七年」と書くつもりだったと思われる）即ち明治元年の生まれと云い、首塚を指差しながら、若い頃に顔に入墨を入れた荒くれ蕃人に殺されそうになった話と、今は日本帝国の高徳により安心して宜蘭に住むことができるという話をしはじめた。何やら警察の誘導尋問の手口に似ていて薄気味悪かったので、余計なことは一切云わず、長生の秘訣は何かと当たり障りのないことを訊くと、五日に一度天麩羅に砂糖を掛けて食べることだと云ってそのまま去っていった。

昨今の本島人は外でも家でも国語を話すのを誉とし、本島人の勤勉ぶりを褒めたたえるが、実は彼らの行為は何も日本帝国の高徳に依るものではけしてなく、総督府は単に国語を話す本島人に種々の便宜恩恵を与えているに過ぎないのであるから、要するに功利によるものである。

昼前に宜蘭を発つ。礁渓は宜蘭より汽車で僅か二十分の距離にあり、汽車の本数は比較に多い。乗合バスに至っては一時間に一本。温泉は駅前にあり、まことに至便。立地は南紀白浜に似ていて、宜蘭線が全通してから基隆台北から鉄路一本で行ける距離にあるのだから、都会の金持ちが出張や慰安と称し女護温泉の看板めがけて多額の金を落としに行くようになり、駅前には客寄せの人力車がズラズラと並び、三鳳や萬華に勝るとも劣らぬ殷賑振りで壮観。（宜蘭の）旅館で聞くところによると、宜蘭は二十年前に庁を廃され台北州の一部に吸収されたため、台北の本庁に御伺を立てる宜蘭役人、宜蘭を視察する台北役人の往来が日増しに増え、又台北役人は礁渓で接待されるため温泉も賑わっていったのだと云う。ならば宜蘭役人は北投に宿泊するのかと訊いたがそれは判らないと云われた。

楽園旅館に泊まる。此処の建物は当世風であり、女中は日本女本島女ばかりで蕃女はなし。まるで内地のよう。礁渓温泉は無味無臭の玉湯であり特に痔瘻に効くと云う。温泉に浸かり滝を眺め、夜は地酒を勧められ飲んでみたら支那酒の味がした。酒の肴に芸妓を呼ぶと、やって来たのは沖縄出身の愛嬌ある女であった。宜蘭界隈に沖縄出身は多いのかと訊くと、数はわからないが相当に多いと云う。自分は本島出身で、良人と羅東に出稼ぎに来たが、二年前に事故で亡くしてから、今は一人で礁渓にいる、子も居ないものだから、月に一度宜蘭へ買い物に行くのがただ一つの楽しみなどと云っていた。人前で唄うのは初めてだと云いながら女は李香蘭の新曲（※渡辺はま子の「蘇州夜曲」と思われる）を披露して呉れ、自分はこの後日本に帰ることを話すと、今度はほれほれの替歌を披露せらる（※ハワイ日系人によってつくられた民謡「ホレホレ節」のこと）。異郷に聞く三味線のなんとも云えぬ哀しさよ。

礁渓から基隆まで汽車に乗ること三時間。宜蘭や礁渓からは蕃地も遠く、見本蕃屋もなく、結局蕃人にも会えず仕舞いなのが勿体なく思う。蘭陽は平野が多く田圃と畑が交互に続き、支那町頭囲（現在の頭城）を過ぎた辺りから今度は海側に宜蘭大島が姿を顕す。又澳底は北白川宮殿下御上陸の地であらせられるが、御不幸にも上陸するや否や宮様はマラリヤに罹りコロリと薨去せられたのだった。そもそも南方は疫病の地で、和歌山でも熊野病と云う恐ろしい話を聞いたことがあるが、台湾のマラリヤはすでに絶滅したのだから、日本帝国の医学の力量は世界に冠たるものである。そうこうしている内に汽車は基隆港に着く。

船上から最後の台湾をつらつら眺めていると基隆山丘に壮麗な摩天楼があることを初めて知る（※許梓桑古蹟と思われる）。船を待つ為に基隆で二日も待ったが、こんなことなら礁渓にあと一泊すべきであったと思ったり、最近萬華界隈では男女（おとこおんな）の娼妓（※だんじょではなくおとこおんな、つまりおかまのことか）も居ると云うから一度冷やかしてみるべきだったと思ったりしたが、よくよく考えてみると台北には殆ど行ったことがなく、新聞や噂話以上のことは能く判らない。

いつの間にか台湾島は小粒になり見えなくなっていた。まさに一炊の夢の如し。それにしても自分はこの後大阪でＯ君・Ｋ君・喜多川君らと会ってこの顛末を話さなければならぬ。喜多川（※諦道。ジャニー喜多川の父親）は僻地から高野山に出家しその後ツテを頼ってアメリカに渡りその地で出世したが、和歌山に居る頃から読経よりも婦女や小供と戯れることが好きで高僧など務まる訳はないと思っていたが、結局悪癖の末にアメリカを追い出され現在は大阪に居ると云うのだから、因果と云うべきだろうが、お互いの人生を笑い飛ばし合うのも面白いかも知らん。

ところで自分は今ここで平穏な台湾を去り和歌山に帰るのは空恐ろしいことであると思う。今日本帝国は支那と争っているが、またヒトラー氏がヨーロッパを解放せんと宣言した以上、今度は英仏にアメリカをも対手とするのは早晩逃れられないことであるし、自分らにも今後恐ろしい運命が待っているのだろう。日本は紀元二千六百年の御大典と浮かれているが、この大典は元寇の如くありとあらゆる災厄が訪れるセレモニーであり、向後三年五年十年二十年と災厄の宴は続く

のであろう。自分は再び台湾にでも逃げ去りたいところだが、それも最早無理で、新豊の翁の如く腕の一つでも折って逃げること位しか思いつかないのだからまこと情けないことである（※白居易の詩「*新豊折臂翁*」からひいている）。

海の奥にようやく見えた小粒は、今度は九州や四国となって、新地の遣手婆の如く自分に薄気味の悪い手招きをしているようである。船は門司に着いて人が沢山降り立ちどこかへと散っていった。自分は神戸まで乗る。瀬戸内海は秋風索漠にして波静か。

（昭和 15 年（1940 年）9 月頃※）

※当初は昭和 15 年（1940 年）10 月頃としていましたが、筆者が南廻道路（現在の台 9 号線）を経由し、台東に至ったことが判明したため、9 月頃としました。なお、南廻道路は 1940 年 9 月 29 日の台風で不通となっています。